

州山北記

流寓江湖何所期歸來霞谷舊棲遲
愛松幽砌時移石栽菊春泥未理籬
野鶴間雲詩隱逸藥爐經卷病生涯
最憐嘔血李長吉雕骨鏤心曾不知
點檢十年心血痕羨人恬淡說桃源
已無德業繼前哲誰把文章傳後昆
灑淚柳絮花笑巷卜居晴好雨奇村
破愁只有間鷗在遲日陂塘芳草暄

緒言

草山の詩緒言

現今我國識者の大多數は國語を統一して言文一致にす
とるいふことに殆んど一致して居る。併し散文を口語
にしてみても、これに對する詩が依然として擬古體のもの
ならば、學者の努力も畢竟片輪なものである。また文
學上から見ると、明治時代には言文一致といふ自由自
在な文體が發達して、小説には十中の九分まで盡くこれ
を用ゐて居り、他の論說文にも廣く應用されて居る。こ
併しこの明治文學の一大特色も散文のみに止るならば、
片輪のものたるを免れない。
私は十年來口語詩の作法を研究して居つて、去る卅九
年口語の短歌のみを版にして池塘集と名け大方の批評

を求めたことがある。今回の集はその時公にし得なか
つた長篇とその後作つた長篇短歌を集めたものである。
昨四十一年来口語詩は文壇の新聞や雑誌で見ると、今日も盛
に論議せられて居る。然るに新聞や雑誌で見ると、その口
語詩といふものは案外にも詩でなく詩的散文である。そ
それは少しも散文とは異なる所がない。詩自由詩などいふも
の作より始めから散文として作ることが多い。詩と名け
て作るより始めから散文として作ることが多い。詩と名け
言つて居る。私も同感である。所が彼の詩的散文の作
者の答辯を聞くに、形が散文に似て居つても矢張詩である
と居るから、その形が散文に似て居つても矢張詩である
と言つて居るが、これは實に聞苦しい答辯である。茲に畫家
に虎を描いて、狗に類するといふことがあつた。

草山の詩緒言

が虎を描いたとして、それが狗に類して居るに人がいつた時、若し畫家が己れは虎を描く考て虎といふことを意識して書いたのてある、故に形が狗になり猫になつて居らうが、この畫は虎だといふならば如何。詩的散文家の答辯の不條理なのはこの畫家の不條理なと同様である。

支那詩の平起仄起及び兩者に通ずる二四不同二六對、西詩のアイアムバストロキと等しく七五七七の平仄は日本詩の正格である。(日本の七五七七は支那の五言七言とは違つて寧ろ平仄に同じく西詩の一強一弱一弱一強の二四不同二六對も支那詩の七言絶句の轉句若くは七律の押韻してない句の第六字を弧平にする時は必ず

ず次の句の第五字を平字にしてこれを救はなげぬ例高[○]歌[○]一[○]曲[○]掩[○]明[○]鏡[○]昨[○]日[○]少[○]年[○]今[○]白[○]頭[○]溪[○]雲[○]初[○]起[○]日[○]沈[○]閣[○]山[○]雨[○]欲[○]來[○]風[○]滿[○]樓[○]が如き、若くは西詩のアリテレンションの如きもみな詩は音律を待つて成立し詩の妙はその一半音調にあることを示すのである。故に日本語の存在する限、七五及び五七の調は棄てることが出来ない。無意識に作られた鄙俗な子守歌にさへ七五の平仄法が儼存するてないか。私は「來た」といへば分るのに「こ」といひ、「高い低い」の方音調が好いのに、態を「たかきひき」などいふ、擬古文辭を斥けるが、國詩の正格たる七五七七若くはそれと多少變化させた平仄法を自由にも抛棄することが出来ない。私は散文詩若くは自由詩主張者に五七七七七の平仄法を無視した散文歌自由

歌を作らしたなら、どんなものが出来てどのやうに列
 べるかと思つて居る。また擬古派の詩人や一般の讀者の中には口語詩の修辭
 の燕穢鄙俗なのを罵る人があるかも知れぬ。併し明治
 廿年頃始めて作られた言文一致の散文は如何に思はれ
 たか。矢張燕穢鄙俗と思はれたてないか。然るに二十
 年後の今日では最圓熟したもの、思ふ所を自在自在に
 述べ得られる文體となつた。口語詩もこれに二十年の
 日月を假すならば同様に圓熟したものとなる、昔は「花
 が咲いた」「鳥が鳴く」のである「など」の語法を卑俗とし燕
 穢と感じた人も今日は最早さう感じない如く、今日の
 口語詩の用語を卑俗とし燕穢とする人も慣れるに従つ
 て高尚雅醇なものとして怪まぬに至るであらう。但し

實際にある燕穢卑俗な點は勿論作者の苦心努力に頼て
 醇化されねばならぬのである。

目次

岐路	一
密語	七
變心	一九
邂逅	二三
初旅	二六
雪鐘	二九
吾姉妹	三四
貯金	三六
はなりのうた	三九
あさのてふへ	四二
かまきり	四三

草山の詩目次

草山の詩目次

ぎいす……………四四
 しんいまやう十二首……………四六
 しんからやう六首……………五三
 秋市……………
 村居……………
 秋夜……………
 新秋……………
 公園觀梅……………
 秋日懷人……………
 阿蘭……………五七
 伏見街道……………六二
 瀬田心中……………六六
 春夜……………八七

草山の詩目次

ゆふべのおもひ……………八八
 鰯上吟……………九〇
 晝納涼……………九二
 新墓……………九三
 冬夕薪を買ふ……………九五
 蘭へ……………九六
 春の曲……………九九
 蟻の天災……………一〇二
 七難圖……………一〇九
 夢ゆめゆめ夢……………一一三
 夕立……………一二六
 おきてやぶり……………一三八
 新琵琶行……………一三三

茶 摘 み



口繪……茶摘女(百首のうち)
 奈良全盛の夢の跡 長谷川良雄畫
 挿書……

深草の秋

(葉師寺三重塔)

草山の詩目次

草山壹百首……………一四五

うさぐさ集……………

清き泉……………一七一

俚歌數曲……………一七三

わがいへ……………一七六

亞米利加竹枝八首……………一八〇

草山の詩

青山露村著

わかれみち

あぼる臚の春の夜の月、花の祇園に生れいで、
あの舞姫の隠兒と、さがない人に歌はれて、
母に齒嚙をさした吾。何でもかでも豪くなり、
後指をばさゝれてくれな、藝人などになるんてない、

草山の詩

わかれみち

人を教へる身になれと、寐ても寤めても言ひ聽かされた、
言葉は今も耳にある。揺られて瑠璃の玉と熟む、
棚の葡萄が涼風に、紅白粉の友達と、
十五の歳の秋一日、狐狸が藪に棲む、
母の膝から離されて、戀も舞樂も夢の春、
洛北の地のもの學び。石の館に育てられ、
懺悔と祈禱の預言との、この森嚴な天地の、
歸つて來るとなつかしや、
中に昔の母の家。聖母マリアの畫像と、
それに短い八年を待たず、あゝ美しく賢うて、
そつと較べた吾母は、玉と碎けて亡い人の數。
そして優しいあの母は、

なに音樂の天才だ。誰が一躰さういつた。
妙音天女が聖セシリアか、一と三との三味線の、
音色も知らぬ文人か。比喩に滿ちた詩のやうに、
思へは床し柿の實が、わが弾き初めた四つの緒や、
重り光る秋の軒、董が匂ひ吹く春の窓、
また濃かな紫の、董が匂ひ吹く春の窓、
搔撫て初めた大琴で、摩訶不可思議な吾命、
祇園の花と謳はれた、母が遺傳へた吾才は、
忽ち芽ざし根をさして、あの眞玉手に培はれ、
世に讃められる花さへ咲いた。それに此間書いて見た
短い暮春のあの十二曲、また誤つて世に傳へられ、
人は天授の才といふ。

草山の詩

わかれみち

なに音楽の天才だ。琴弾いて居て一代の、
人の心が新しう、鑄かへられよか。
思想の潮ながれ急に、煩悶懷疑悲痛の
聲もの凄いまち巷。世はなべて、
潔められない物慾を追ひ、物堅い
昔の教の名残もなんだ。國の爲には己を捨て、
己の爲に己をば捨てない同胞、
大愛國者、滅びの魂。なに忠良の宰相か、
衣冠を脱げばたゞましら。なに勇猛の將軍と、
劍を解くとたゞ匹夫。道を蔑して公に、
男女の亂行や似たる陽貨を孔子といひ、
稗をば稻に等しとし、放縱なを自由といひ、
自然と名し。大きな泥手差伸べて盆の柿の實攫むのが、

成功である。何の悶か悲か、女の笑容、黄金の光。
鎌を手にして静やかに、祈禱に暮らした英雄もある。
實在の神、不滅の生命、まことの智慧と幸福は、
この泉をば酌んで知るのだ。噫一世を靡き、
この源を示すのは、誰のつとめか。

なに音楽の天才だ。聲がおれの琴ほめた。
いや否、昔の友達も讃めたぢやないか。
赭黒の鬚を引つ壊し、泣かしてやつたあのお洒落、
舞が自慢の虫喰齒、あれらも今は祇園の名妓、
二たび三たびあの曲を人に弾して誇つたと。
淫れや奢り偽りや、これは習慣色街の。
霜夜の格子、門附に白銀投けるおもひやり、

草山の詩

または黄金の簪を孤兒のため抜く情け、
 これ淫女の心の奥の神の御姿。
 見よ戀に命を捨てる者もある。舊誼を忘れない、
 やさしあれらや
 大獅子吼する豫言者の力もなうて、
 なに負ふけなわが慨き。寧ろ生涯一張の
 琴かき抱き千年の都に咏じて老いたがよかる、
 山と流と書と歌と戀と譽は侍女。
 彌生は四方の花盛、靴馬の山は雲珠櫻、
 御室はそよと吹きそよぐ風をもいとふ花の幕、
 蒔繪瓢を枝に掛け、言葉身振も物柔かな
 男女のさゞごとや、懐紙出して歌よめば
 袖をかざして舞ひもする。衣更して初夏や、

遠く若葉を尋ねると、萬のものがみな碧い
 兎道黄葉は茶の匂ひ。水に涼しい燈の
 蟬の小川に秋立つと林の小逕露冷かに
 月閣に入る金銀の寺。鹿の跡踏み紅葉ふみ、
 暮れては歸る高尾山。磧に霜の冴える夜は
 一つ肩掛着て話すその密語洩さうと
 しば鳴く千鳥小夜千鳥

ゑい、なに弱い吾志、耶蘇基督も亡き母も
 よくみそなはせ。この居室よ床し懐かし。
 まだ破れないこの三味や、この手箆筒や、
 舞の衣とわが木綿着と一つに掛けた塗衣桁、
 いつも涙で言ひ聴かされた優しい姿。

文明は僅かの人に幸福を與へるばかりか、
 貧しい者の生活や、智慧やどれだけ進んだか。
 何の文學藝術だ、たゞ富人の逸樂を助ける器。
 鏽刀もて外人の首を齧るのは大野蠻、
 大砲列べ數知れぬ人を屠るが大文明だ。
 平和の君は十字架で辱を忍んで死なれたが、
 四海の内は兄弟は不義の血潮も今もなほ
 渴いた耶蘇の御口に強ゐる。
 社會主義ちふか、神を認めぬ破壊主義、
 社會の上の虛無主義と道德上の虛無主義と。
 弱者の味方といふはよい。なぜ人倫の楯突くか。
 噫國興り國亡び、人は生れてまた死んで、
 千度百度世は變つても、萬樹の桃に牛を飼ふ

桃源洞は夢語、かの西國のものじりが
 屢書いた樂園もみな唇氣樓。貧富の境と國境の
 標を焼いて、地には平和人にはめぐみ、
 神の御國が建てられるのは果していつか
 噫遠大な吾等の業や

けれど思へば吾腕はダビデの琴を搔鳴らし
 惡鬼を王の御胸から逐出す力はなからうが
 なほ後の世に清らかな響を傳へ、
 それが吾身の天職ならば。
 そしてまたあの中京の柳を結うた高島田、
 花に白粉した笑顔、七棹の小袖襠褌帯長襦袢、
 菜の葉の口に夫ぢやといはれ、

わかれみち

「腕久」舞ふ手に手をとられ。
ゑゝ犁に手をつけてまたも後を顧みる。
あゝ吾琴は俗世に媚びるが爲めに鳴つてはならぬ。
若獅子を搏にするの力をば神よ賜へよ、
わが筆に雲、舌に焰を、
その時細う鳴れ吾琴も

噫八年は夢の間や、石の館のわが學び、
優しい母の面影や。
生命の樹の實か、藝術の花か、
もの柔かな希臘とも厳かな希伯來と
花の祇園と露霜の洛北の地の調和に
人生の理想はかけてあるが、花の祇園よ火に焼けよ。

その舞殿も灰になれ。あゝ岐路分れ道、
荆石礫凸凹の窄い路をばおりや行くぞ。

みそかごと

墨染の花どの花を、撞木町どの柳をば
いゑ、吳竹の伏見から嫁が来るのもみんなうそ。
この深草の大庄屋のむすこが誓かへやうか。
あなた一人を吾胸に生涯かうしてゆくちふに。
上と中とのをなご衆が着物も縫へば客もして
なんの不自由もない吾家。

草山の詩

あなたは竹伐り柿も賣り、小作が運ぶ年貢をば

とらねばならぬ倉あけて。

だから醍醐の酒屋からもらうのでしやう良い婿を。

な、さう、それも噂なら、たゞ噂ならよいけれど、

縁續とはいひながら、來てもらへな行けもせず、

かうして山の西東、隔てゝ居れば鬢の毛の

亂れて切ちな物思ひ。ないことさへも疑うて

なほ行末が氣にかゝる。

さうさへきけばわかります。いつたい戀は鴛鴦の

並び接むのが戀ぢやなし、たまに逢ふのが戀ですわ。

わたしやこれでも天領の山科郷士のまな娘、

男の所作はてきますよ。

隔ては小山たゞ一重。もしも俄に逢ひたけりや

互に夢でしらせましやう。そしたらあなたは紫に

躑躅花咲き山鳥が岩根を走る鳴瀧の、

むかし元政上人がお遊びなされた鳴瀧の

溪をつたうて來てください松の香そよぐこの山へ。

その時わたしや裏の山、むかし大石良雄が

藤を手折り栗拾ろたその山路をたどりきて

戀しあなたに逢ひますわ。それでよろしうムんしやう。

ゆくすゑのことは末のこと。それで見える京の街、

松の陰からきら／＼と遙かに見える京の街、

玉敷く家も裏家にもこの美しい戀をする

二人が何處にござんしやう。

こゝろがはり

薨は含む四山の翠。窓には映る樹々のくれなる。
 げになつかしいこの都。
 ことにわたしも忘れません桃と柳の會堂や
 連翹の花が戸にまよふ清い巷のむかしなら。
 けれども雁にことづけて心の契たちました。
 いまのわたしでござんする。そのわび住居立寄つて
 またそんなこと仰やるはわたしを侮りなさるんでしやう。
 もうもういんでくださんせ。

あちらのおくらし知つてからあなたに捧けた吾愛も
 敬もみなさりました。「鹿の溪水慕ふやう」
 わたしは神を慕ひます。玉賈か徑寸もある夜光の玉を
 見るやうに私は道義を重んじます。
 あなたは無神論者です。功利の人でございませうか。
 無神論者にかしづいてこの世が清められませうか。
 なに、學説の、はい、學説のお變りですと。
 荆のやうな學説にどうして葡萄がなりませうやう。
 靄暖かな冬晴の黄色の枯芝生、
 脊をは二人がもたせかけ、西の詩選を読みあうた
 太い銀杏の大枝も雷に裂かれて枯れませうか。
 また大比叡の溪間から採つて来て挿いて下つた
 眞白な百合もとこしへに萎れて落ちて秋の風。

こゝろかわり

こゝろばかりと、ゑゝ誰が。心變はどちらです。
神の幕屋を脱け去つて黄金の神の祭壇に
膝をお折りになつたのは心變りてございませぬか。
珊瑚のかざし玳瑁の櫛、みめ美しい人は
あの地にたくさんありましやう。わたしや頑固な處女です。
あなたのお妻にはようなりませぬ。
蟬の小川の清らかに、ところどころに雲のやう、
古い樹立の立ち繁る洛北の地の假住居、
天の使を夢にみて、わたしや暮して居ります。
もうもういんでくださんせ、園の木の実は喫ませぬ。
もうもういんで下さんせ。

めぐりあひ

花ちりはてたいけばたて
おもひもかけずめぐりあひ、
なつかしいやら悲しやら、
世がなさけなうなりました。
あなたにこゝへ連れられて
來たのも春のゆめ夢中。
あゝ耻かしいなつかしと。
あなたの口には酒がある。
そのなつかしい耻しは
心から出たこゑですか。

草山の詩

めぐりあひ

あなたにわかれてお芳さん、
ながのとしつき春雨に
もみぢの秋にあの國でも
折りくちもひ、かへつては
噂をきいて心をば
いためてゐたのに夕月夜
思はぬとこでめぐりあひ。
酒か心かしらないと、
なるほどさうで、
長いひわけしませぬと、
さかしい悪いかたくな

世がこのやうにしたのだと。
ゑいお芳さん、
なさをひさぐ女とは。
色香で權威と黄金を
弄つて笑ふ内侍だと。

あなたのは美しい。
そのもろはだは柔かな。
けれどむかしの薄紅の
桃はきえうせ、春寒の
ましろな梨の花みるやうに、
ひとしほ凄うつくしいのが
わたしはまことに悲しくて。

草山の詩

ふしなになんと
梨をば桃にかへすため
あなたがば買へ今宵いま、
こがねもなにもいらないと。

なるほどあなたの仰しやるとほり
戀を黄金と名に賣つた
夫人はたくさんありましやう。
柳の青いかくれがや
いやしいものに戯れる
貴い夫人もありましやう。
なるほど一人に操をうるも
萬人にうるもおなじこと

黄金を投げて身をけがすのも
黄金をとつて汚すのも
おなじ淫れた女でしやう。

けれどもそれがどうですか、
あゝおさん、みづからを
あなたは棄てちやなりませぬ。
くされ草履に隣して
のべの董はにほてゐる。
世がどうあるがかうあるが
價値は己れにあるんです、
我が身のたからです。
牡丹の白う咲いたよな

きよいその手は字も上手、
 裁ち縫うわざもよくできる。
 どうかあすからその華美な
 羽織袴をぬぎすて、
 質素なくらしをしてください。
 あなたは人世をみあやまつて居る。
 その話をも致しましやう、
 昔話もしましやうよ、
 いちど尋ねて来てください。
 名刺にところも書いときます。
 かどべに太い梅檀の木のある家ですよ。
 まだ山櫻一株が花が残つて居りますよ。
 これはなめげにあたりましやうが――

ゑゝこりあなんと、
 しるもの賣らずに錢とらないと。

いゝゑわたしは買ひました。
 雲と凝つたるくろかみや
 白くもさえたかほばせや
 玉やわらかなもろうでや
 そのうへ深く奥ふかう
 人にしられぬ悲みや
 今まで買つて居りました。
 あゝお芳さん、
 あなたの口には酒がある。
 けれども聖い性霊が

めぐりあい

その唇を衝いて出る
あなたは缺けた玉ではなうて
くもりがすこしてきたのだ。
憚る人はおりませぬ。
小さいかりやをこれからは
必ずたづねておいてなさい。
わたしはあなたを買ひますよ。
なにをすてゝもこの玉を
おれは贖ひかへさなゝならぬ。

初 旅

「お母さん起きて、夜が明けた。
遅うなつてはいけませぬ」
「もつとやすんでお出なさい、
まだくゝ早うございます。
いま十二時が鳴つたばかり、
窓にさすのは月明り」

「お母さん起きて夜が明けた。
隣の初刻鶏がいま鳴いた。
遅うなつてはいけませぬ」
「隣の鶏は早う鳴く。」

草山の詩

初

旅

もつと眠つておいでなさら。
早う起きてもしようがなさら」

「お母さん起きて今度こそ。
時計が四つそれ鳴つた」
ともしみつけて帯しめて
寢室を立ち出た母親は。
兒は跳ね起きて春戸を出て
手水つかふも忙しや。

竈は燃える飯は熟む、
母の小さい獨語
「大和はゆかし古國や、

中でも静かな奈良の春、
お寺の壁に神垣に
一樹の櫻分けて散り……

「お母さん飯を喫べまする、
まあ色の佳いこの香物、
あつこの飯の熱いこと」
「白い蒲鉾黄いな湯葉
紅葉麩交せて梅干添へて
御飯は握つておきますよ」

……雄鹿雌鹿は草に立つ
森のほそみち花の陰。

草山の詩

旅

初

またなつかしい三吉野や、
あの南朝の夢の跡、
落花のむしろ鳥の歌
二人が縁も風雅から

「草鞋穿かうか足袋はいて、
辨當は脊中へ負ねやう」

「紙はお持ちか手拭も、
それ墓口も懐へ」

折から戸をば叩く聲、
「式さん、できたかもう行こか」

「まあこの人の早いこと、

わたしの方もできてます、
こちらへ這入つて腰おかけ」

「伯母さんわたしは嬉うて
昨夜は十分寝なんだが
それでも今朝は早う起きた。

先生に聞いた三笠山
南圓堂や春日野や、
それから大きな大佛さん、
簇て楠正行が
辭世を彫つた扉をも
花と一所に見てきます」

草山の詩

初 旅

「お母さんさよなら行つてきぬす。

土産は何を買うてこう、
紙鹿か人形か奈良漬か、
蓬團子も買うてこか」

「はい何なりと好い物を、
何事もよう氣をおつけ」

小袴着けて帽子きた
十歳十一歳のこどもらは
椿の門を潜り出て

曉靄の中を行く。
涙浮べた母親は
後姿を見送つて

「あれしほらしや十年を
てしほにかけた子よ行きや、
土産も何もいりません、
今歳尋常卒業の
花の初旅世の旅に
また新しい知慧を得て
歸りや母の懐へ」

雪

鐘

梅をば埋め竹を折り

草山の詩

雪

鐘

宵から續く大雪に
 飢ゑた狐の聲もせぬ。
 いま五つ六つ鳴つたのは
 あれは曉告げる鐘。
 あゝ寒山の巖に鳴り
 萬戸に響く鐘の音や、
 誰がそれをば撞くのやろ。
 思ふは苦行の若い僧、
 人は爐でいぎたなう
 浮世の夢を貪るに
 三千世界醒さうと
 暗に光の聲揚げる。
 いま鐘樓は雪滿地、

草
山の詩

僧は凍つた手をは吹き
 雪をば袖でうち拂ひ
 素足踏みしめ踏みしめて
 敷へるてあるも幾つと。
 あれもう鐘はやんだらし。
 鐘撞きやめたあの僧は
 ふたゝび部室で寝るやろか、
 天地はやはり暗の中。
 思ふ健氣なあの僧は
 溪間で昨日拾ろてきた
 軒の枯柴抱いてきて
 厨で早う火を燃やし

わが姉妹

朝食の用意するである。
さうてないならあの僧は
行燈の前にまた座り
凍つた火蓋掻き立てし
経の注疏を讀むてある、
昨夜も寒い窓のもと
夜更けて半ば讀み罷めた。

わが姉妹

あめりかて自活學生のうたうた歌

草山の詩

「街のゆきしで見もしらぬ
日本の女にあふときは
顔をそむけておれあ通る。
色が黒うて脊がひくて
あひるのやうなあるきさま。
みにくいなりそのうへに
人のみきゝも憚らず
わけないことをべらくしやべる。
髪は香に濡れきぬあたらしい
わかい男の罵や。
「わたしやこの家いやざんす、
あなたことはりくださいな。」
さけばうれしや女のたのみ。」

貯

金

「あなたはどこにすみやしやんす、
 わたしはそこな横町に。
 あなたあそんでるやしやんすかゑ、
 千三百をとほしやんせ、
 六枚だすときゝました。」
 きけば嬉しや女のすゝめ。
 色がくろてもせがひくうても
 姉ぞ妹ぞわがめには。

貯

金

深草小學校であつたこと

をさないときからこどもらは
 貯へしつけねばならぬ。
 それゆゑ学校の先生は
 ちよきん貯金といひさかす。
 それをはげますてだてとて、
 せんせはをりくその組に
 通帳をばもてきさせ
 多い少いくらべみる。

ものもちの子はおもちやゝら
 菓子にしまつはしなくても
 かねはだんくふへゆくが、

草山の詩

貯

金

ふやせぬ子らのあはれさよ。

先生のしらべあるごとに、
高の多い子はほめられて、
少いものはしよげてゐる、
貯金しらべの日は悪日。

ある日教場てせんせいはいは
金のだしたるかよひとり、
おこつてわけを問うたとき、
そのこは黙つてうつむいた。
そこでせんせはいだけだか、
「あのよにいうておいたのに、

なぜにかねをば引き出した、
さあ〜どうしたその金は。」

こどもは涙ほろ〜と

「おかあが米を買ひました。」
貧乏のこどものふびんさよ、
貯金調の日はあゝ悪日。

はなりのうた

さよいはるまもみおびもきぬも

草山の詩

花いまりへんかん



はなうりのうた

はなのほひにくんずやう。

とこのかけものらんまのがくも
はなのほひのとほるやう、

けさふくこちにおくられて、
もつてきましたわたしぞろ。

きよいこがはのみぎはにさいて
いろかあらそふはるのはな、

いろのよいはなかのよいはなも
はるのいろかはみなこれに。

もゝもござればれんぎよもござる
さくらのはなのはやざきも。

ちさいかめにもおいけなさいな
たまたまつばきたまたまは。

こゝてかはれてみやびのいへに
うれしとおもふははなのみか、

ゆかしいさまらのなさけのつゆに
わたしにもほふはなぢやもの。

草山の詩

あきのてふへ

あきのてふへ

三春をゆめにみるなら
あはれてふそのまゝさめな。

あきたけてひかげもさむい、
ゆくてにはなにのぞみが。

あめにぬれうつくしはねも
うやつらやはげたぢやないか。

のこるかはたづねてもない、
めさめてはたゞなみだのみ。

三春をゆめにみるなら
あはれてふそのまゝさめな。

かまきり

さんかくのあたまなかばはめ、
寸餘のからだみなこれきも。
あおりしさをやてきにあひ

草山の詩

かまきり、ぎいす

みがまへをするむしやぶりの。
龍車さしつてくるならこい、
弱肉強食なにぬかす、
大國こはがる宰相め、
このおれさまをみねいかと
かまふりあげるてまへこそ
あゝむしるゐのけなげもの。

か
ま
き
り
す

ひかげもあをいわかすゝき

むぐらよもぎのしげりあふ
なつのまひるの炎天に
はずゑはうらになくきいす

かぼちやのはなをぬうたよな
うこんもめんのかぶとんで
をさなごほめをとぢかけた
まもれぎいすよそのゆめを

作者もうんでふてなげた
さみのほそいとならすよな
すゞしいきよいねをたてゝ
またその興をふりおこせ

草
山
の
詩

しんいまよう

やまほとゝぎすさつてのち
くちなとかけがはひだして
神韻の詩はよにないが
くさにぎいすはうたつる

しんいまよう 十二首

だひしらず

ひとつの姓にならなくも
たのしやきよいまじはりは

はなのたかどのみづのいへ
やさしいともがわれにある。

わたしまつまにたちよつて
きよいそつてもとつたのに
ひとはかへらぬあをやぎの
みどりにはるがかへつても。

はなのいろかはしらないが
やまほとゝぎすひるもなく
まつの茶藨の詩と書とて
みやびすがたにみはほれた。

草山の詩

しんいまやう

かいてくるのはたゞ神カミ寵カミは
はなでわかれたあのひと
硫黄のけむるしまやまて
聖書をしへてはや九年。

同

薄命十年詩において
われをしるものいまにない
あのこおもへばかなしうて
ないてわかれたおぼろよが。

同

このまにひかるあのほしを
たまとつらねてかざりたや
希臘ギリシア型のうつくしい

きみがかうべをくろがみを。

同

ほたるとばせてきぬがやに
かをさけながらやまみるに
摩詰たづねてきた天女
まねきいれよかてゝあほか。

同

くりがはじけてかきもうみ
醍醐山科チゴのあきや
ながれてさあゆつるとゆて
はじめてきみにあうたいへ。

同

おもひなやんでまひあふぎ

草山の詩

しんいまやう

わすれてきたときのもとに
あひよなにもうちあけて
きみとわれとは再また從い兄弟。

同

無絃のこともあもむきを
たがひにめて、あうたかて
いひはせなんだこひもいま
てにてがふれてはなのかげ。

同

むとせかへつてまたあうと
きみはいつしかさだすぎて
春色しゆんしきふかいかさつばた
いまもさびしのひとりみて。

同

ないてとついだこひとは
はやいとしごをまうけたと
むねとむねとにはうむつて
もうはなすなよあのときを。

今様は昔祇王や佛や静などの白拍子に歌は
れた歌で明治の新國詩は實に此に胚胎した
のである。口語詩も讀まれるばかりでなく
歌えるものであることを知らせる爲め假り
にこの新今様に現今最廣く知られて居る螢
の光の譜を附けて置く。

草山の詩

草山の詩

やまひのからだを、自ら扶け、
 秋市
 しばし來てみる下京の秋。
 小袖襦袢あかいつりぎれ、
 柿栗菜萁やあをい柑子や。
 軒端に萎れる菊を憐み、
 知られぬ女の集を抱く。
 夕暮疲れて家路に就くも
 昔の戀は何處へいたやら。
 村居
 みなみへ開けたらむ三十戸

しんからやう 六首



しんいまひう



しんからやう

小山かさなり水も流れて。
梭をとる手に琴弾じさせ、
柴刈る袖によい歌秘める。
藤はむらさき春の戸に垂れ、
柿の紅葉があき庭染める。
市へてい買ふうつはもほんも。
こんな生活がなぜできないか。
菊瘦せ虫歌んで今霄の淋しさ。
年もあひくふけてゆくよ。
霜は寒い大和大路の月、
狐は鳴く紫野邊の秋。
四十いろ衰へてなほ聲を賣り

十年名も無くたゞ鑿をとる。
洛の家々物語めいた
愁を話す人いくたりぞ。

新秋

いぢはやく初めだしたか
虫のこゑ読書の聲と。
野は分つ千家の月、
山静か一龕の燈。
劍を學んであはれも學び
字を知つて愁をも知る。
この腕と魂とて
なに起つて世と闘はう。

公園觀梅

草山の詩

しんからやう

夕月おぼろに風あたゝかな。
これまた都の梅のなどころ。
人去り人來る林のこみち、
にほへよ緋の袖小倉袴も。

秋日懷人

秋風さむく海の西から、
中の亞細亞はいまも秘密。
おもふは君が天山南路
日落ちてあらの一騎でゆくを。

お 蘭

お蘭廿歳を三つ越えて
娘盛りも過ぎよとす。
身を藝術にゆだねては
たゞそれのみがものおもひ。

暖簾も古い京紅や
紅屋のかどは通りすぎ、
黄楊の小櫛は手にとるが
てふくゝの髪もみだれがち。

化粧の代を筆にかへ

草山の詩

お

蘭

小袖のしろは墨糸のぐ、
虫に喰はれた唐本が
机にあるもまた風雅。

家は京洛に住むゆゑに、
四百八十餘の寺の
古人の高い筆痕を
あこがれ學んだばかりかは、

春南朝の花を訪ひ、
夏は南紀の湯や瀑や、
さてまた秋は笠取て
尼と寝て聽く鹿のこゑ。

寫生の域もはや去つて
もの心を探りくる。
清い意匠を糸がいては
氣韻流れる絹の彩。

戀か月かや歌がるた、
そら好色漢のあそびもの。
もとさま参る水莖の
跡にも耻ぢよ町娘。

大雅堂また世にいでゝ
祇園の茶屋で口説いても

草
山の詩

お 蘭

なびくは門のあをやなぎ
かへつて書をばねだられやう。

なさけ知らずの衆俗の
そしりは丁稚にをさなごろ
途とめられたほどもなく

「菜の葉」に情も寫したと。

色を空とは畫師いはず
禪師の喝も丹青にこそ。
みめがわるいといふならば
なぜ袖にいる懸想文。

何にも代へぬ畫の執は
噫これたれが賦與したか。
お蘭にふさふ人のあれ、
いな否あるなあれあるな。

躑躅は落ちて苔を染め

に梧の陰碧う

市中もきよい夏景色、
街に女が瓜を賣る。

爐で初花のたよりきし
春のころから苦心した
小原行幸の圖をしあげ

草山の詩

伏見街道

お蘭がけふのよろこびや、
ゆあみもかるう打ち對ふ
百年傳へた古鏡、
鬢搔き上げる姿なら
やはり美しくし京娘。

伏見街道

五條南へ稻荷まで
廿と二町帯のよて

小家小店が立ちならぶ
趣多い街道や。
この街筋の兩側は
靄暖かな河渠の
岸を蒲公英菫染め
杭に浮藻がまとふよな。
根芹壬生菜は若やかに
蜜柑の香ひあまい軒、
野邊の緑を餅屋では
蓬團子に匂はせて。
さて道具屋の店みると
古い障子や古襖、
「月落鳥啼」てなど

草山の詩

伏見街道

落書のした本箱や、
にせの貫名の長額も
堅に柱にたてゝある。
街の春風そよ／＼と
白木格子に動くのは
男女と染め分けた
湯屋の暖簾の薄淺黄。
いま午過ぎて七つ時、
七條あたりの賑や
魚を買ふとて梳髪の
長屋の妃軒に立ち
飢ゑた裏屋の千松は
焼藪の香に慕ひ寄る

草山の詩

一、二の橋や三の橋、
生際清い若尼の
袖黒染のやさすがた。
八の字髭と丸鬚が
手に手を組んで来かゝるは
稻荷詣の歸途らし。
酒樽運ぶ牛車
客乗せてゆく小車の
往くさ来るさの音響。
あゝこの街の生活の
詩や畫のやうな趣や。
百年前からかうである、
百年後もかうである。

瀬田心中

時々刻々に人生の
潮が長いこの渠を
湖りゆきくだりゆく。

瀬田心中

とけて流れて比良山の
暮雪も萱の根を傳ひいて
やさし男鹿が石斛の
巖の陰から頸のし
谷川に飲む暮の春。

草山の詩

また杉深い大比叡は
中堂あたり花ちりみだれ
難行苦行に石踏んで
山をば巡る阿闍梨の裾に
焔と燃えて木瓜が咲く。
二つの山をうしろにし
堅田の浦は晝のやうに
藁屋の白壁邑をなす。
こがれなき水際で遙か
越山をながめて泣くは
身をなげた宮女の魂は
菜の花も暮れ湖もくれ
菜の花も暮れ湖もくれ

燈點すころや家々の、
 木綿羽織の若人が
 みせやの軒をくゞつたが
 髪艶やかにいろ白い
 この娘は嬉しそに、
 「ようこそお出でぐださんした。
 昨日も今日もお顔をみず
 わたしや案じておりました」
 男はあがつて手をひかれるやう
 二人火桶へすりよつた。
 「また奥さんとぜりあひを
 なさつたのではなかるかと」
 「もの耻しう静やかで

娘はみんなやさしのに
 女房といへば誰もかも
 あゝはしたないものだろか
 昨日もわたしの袖をば把つて
 あの菓子屋には美しい
 招ぎの猫がおいてある。
 あまりに深うまよひこみ
 うはさが高うなつたなら
 この家の名に傷つける
 はやうあの子と手をきれといふ。
 それにさがない世の人や
 男と女とふたり寄りあ
 すぐに色とか戀とかいつて

まことに困つた話だが
 あなたの話が氣にかゝり――
 「それはまことに御迷惑。
 お年のうへな奥さんは
 殿御が可愛うてならないと。
 悋氣深いのは可愛いから
 果報なかたはどなたやら。
 これからあなたおとなしう
 お内を守りなさいませ
 家を出まして今宵さり
 わたしはお顔を拜みません
 それにつけてもお力が少しかりたく。
 「ゑゝそんな追つたことが出来たので」

「追つた段ぢやありませんね。
 昨日結納を納めてしもて
 明後日祝言さすといふ。
 あゝ銀次さんわたしほど
 うんかたの悪いをなごがムりましやうか。
 おもひの残る故郷を
 あんな次第で伯父から出され、
 京のおたなのかみをなご
 六年七年奉公して
 心おさまり身もかたづく
 思ふたやさき御家の破滅。
 こんなに年が過ぎてきて
 歸つてみるそのむかし

瀬田心中

思ふた人はもうおもはれず。
 はつもえの若草よりも
 さだすぎた戀がうれしよ、
 暮れかゝる春を、しんて
 藤蔓のまつはるおもひ。
 それにまたこの難義
 どしても厭な縁結ばそと。
 今夜裏から舟出して
 對岸へ渡つて木の濱の
 婆さんに頼んで身のふりかたを
 「そんなことをばいつてはならぬ。
 そんな短氣はしなさるな。
 今夜は兎も角家で寝て

草山の詩

その話とかとりけしたうへ——
 「どうして話が消せまじやう
 日も定つた祝言の。
 帛地さやかに描きあげた
 子の日遊びの繪がけせますか。
 それよりあなたに觸押してもろて
 對岸へ逃げたそのうへで」
 「さう聽けばさうではあるが
 困つたことだ」
 あんな男とつれ添うて
 だれが生涯ゆけまじやう。
 けれど思へはかうやつて
 家をば出ても薄命な

わたしのことならまたさきて
 どんな憂目をみやらやら
 どうせ極つた運ですと
 ほろほろと落ちる涙や。
 手を拱いで黙然と
 聴くをここにもまた涙。
 崑崙のこゝらの玉も
 戀人のもろほを傳ふ
 うつくしい涙にしかぬ
 やるせない胸のしるしと。
 「さけば悲しいその言葉、
 おもへば悔やしわたしの身。
 若しもわたしがひとりみならば

どうなとあなたをてきやうが
 身を誤つて養子となつて
 鼻木いれられ繋れて
 青草に飽く黒牛の
 男甲斐ないいまのくらし、
 春日の深い竹に啼き
 梅の花浮く溪水に
 飲む鶯のさまゝにならず。
 思へば戀しあのむかし
 野邊で芹摘み嫁菜つみ
 街で祭をして遊んだ日。
 しかしわたしの運命は
 みづから招いだものですわ。

ふゝお志賀さんうんかたと
あなたは常においひだが
運ちふものは誰のでも
さまつたものぢやありませぬ。
たとひ決つてあつたにして
どういふ風にはあつてあるか
知つてるものはありますまい。
誰も知らねばうんかたは
さまつてをらぬとおなじこと。
つたない運に遭うたとて
もしあきらめてをつたなら
それが即ち運となり
奮つてその運うち摧き

好い運命をたてたなら
それその人の運である。
わたしの家をば飛び出たならば
耻とわらひが運となり
しのんで和合するならば
歡びゑみがうんとなる。
どちら擇ぶもわたしは心
決して運のさしづはうけぬ。
あなた身の上一つて見りあ
明後日いよ／＼婿さまを
もらつて悲しう暮すなら
それが一生の運となる。

もしもまたこの場をよけて
 好い機をみて好い婿とつて
 生涯樂しう暮したら
 それもあなたの運である。
 どちらもあるあなたが今えらぶので
 畢竟人の運命は
 力と辛抱でどうでもなるもの」
 「それではあなたはわたしをば
 對岸へ渡してくださいますか。
 さうさゝやわたしは嬉しいわ。
 どうぞこの後もしつまでも
 妹と思つてゐて下さいよ」

朧おぼろの春の夜の
 櫻の逕のくろいかげ。
 それを妬んで出た月姫や。
 裾が觸れたかまださかぬ
 菖蒲の苗もさと薫る。
 かきからのぞく山吹よ
 まことにものを言はぬなら
 お志賀の行衛かたるなよ。
 「それ石段があぶないと
 いふて居るのに……手をおかし
 だれに見せよと今日ゆひたての
 髪はさだかにもえなかが
 きめがこまこてももながの

瀬田心中

浮世繪にでもない顔や。
 それと並んで若輩の
 すらりと高い男のすがた。
 「あなたはあぶない役をばさせる。
 みつけられたらどうならう
 まるで驅落みたやうで。
 「あなたとわたしと一所だと
 それでも人がいひますよ」
 やがてお志賀を扶け乗せ
 銀次は石を櫓で衝いたので
 舟は沖へとすべりてた。
 ひとしらぬ歎きを抱いて
 いづかたへ春はゆくやら。

草山の詩

はげた袖ひいてとめても
 ひとよさもとまるとはせぬ。
 浮世なれて静やかな
 ひかりと水のうみのうへ
 月のほかにほだれしらぬ
 ふたりが戀のあめつちや
 それも悲しいさゝめごと。
 「蓬嫁菜の青む春
 をさな遊びのまゝごとも
 わたしやあなたの内の嫁
 あなたは可愛い銀さんで」
 「また學校の白壁に
 相合傘で名を書かれ

耻かしがつて泣いたのも
 短い夢やうたかたや
 「もしも今ならなに憚からう
 おもひのまゝに言ひ寄つて
 ひとにはやりはせぬものを
 戀しやら耻しやらで」
 「瑕かない壁を鐵槌てつちで碎かさうとは。
 もしもわたしが獨身ならば」
 「もしもひととりであつたら
 わたしをどうしてくださんす」
 銀次はおもはず手をのべた。
 男は手をばさしのべて
 女をまへへ抱きよせた。

をんなはそのまゝ身をかかせ
 をとこの胸に寄りかゝり
 「銀さんわすれて下さるな
 このひとゝきのなさけをば。
 目を盗むのは悪いけど
 こればかりなら奥様も
 さほどに怒りなさるまい」
 といふや朱の唇を
 ひたと男の唇へつけて重ねた。
 あたゝかなうみの夜風よ
 吹け夢をしばしがあひだ
 どの岸へ漂ひゆくも
 かなしみのあくた木の屑。

女はやがてつと離れ
 「こんなことをばしちやなりませぬ。
 わたしの人でないものを」
 堅田遅れてたつ雁の
 そらに鳴く音か櫓のおとか、
 舟はゆらく漣を
 亂していつたがあゝ機會、
 櫓網が切れてぶつゝりと
 押手は舟から逆まに
 ざんぶと水へ落ちこんだ。
 あれと叫んで諸手して
 陥まつた人を捉まへた
 をんなも重さに引張られ

おなじいさまで陥つた。
 ふたりは遂にあがりこず
 漫々とした廣いうみ
 ぬしない舟はこの月に
 どこの淺洲へ鴉の巢と
 よるであらうか蘆分けて。
 あめつちの奥には黒い
 頭巾きたものが立ちゐる。
 泣く女わらふ男よ
 うつくしやあゝはかなやな。
 二人の死骸はあくるあさ、
 岸の青草萎々と
 王孫去つて歸らない

瀬田心中

恨を風が吹く瀬田や
その長橋の橋杭に
互にしかと抱いたまゝ
湖藻と共にかゝつたが
若い男女の情死のつたが
うはさははすぐにみづらみの
西に東にひろがつて
ことあれかしと待つて居る
京大阪の新聞は
艶めく筆でおもしろう
「痴情の果」と「密通の
次第」を萬戸の家へ傳へた。
しるしらぬよいわるいみな

あさはかな人のいふこと
眞理をば手にもつものは
月星を鑄たものばかり

春

夜

草山の詩

はづかしかつたそのひとが
いまはひたすらこひしうて
クレオパトラとさしやかれ
へびにかましはしまぬと
うでひきながらちぎりそめ

草
山の詩

おこなひきよいあまぎみの
ねづみのころもうすぐるう
ゆふべしづかにくれてきた
ゆふひをしるうみにあびて
あひるのむれがみぎはをば
とやへかへつてこはらどき
いちにちひどいはたらきに
つかれかへつたはらしき
くさかみあいつたうしき
しづかみあいつたうしき
そらをはしつたうしき
いかりはおろすよやまのほも
とりもはやしにねてゐやう。

春夜
ゆうべのなほ

ぬれてなまめくかひだうの
はしたなさはだれがいふ
このこひしさをこひしさを
のにつゆはないつきおぼろ
くさをもちりてはなそぐに
あまのつのとをたゝいてよ
をんなのあしでこえたかて
ひとめのせきをなひとよ。

ゆ
ふ
べ
の
を
も
ひ

あもひなやむもしかたなう
てなれのすきをとりだして
またすきかへすむぎのあひ
よめなたんぼこいろあをう
これほすみれかしほらしや
はるあたゝかくなつたら
むらさきにきくなつしるに
はなうつくしうさくものを
われはそなたをすきかへす
いつとにたぬむぎゆゑに
あゝなさをけないよのさまや
たゞくうたぬのきるため。

まつのほそはのこひいたぬ
かせさへやんておとがせぬ
すべのものがやすんでも
やすまぬものはわがおもひ
かぎりもしらぬおほぞらに
ときほろびぬおほくづの
とりかゞほろびぬおほみて
なにとはなしにもあのおもふ

權上吟

ひるすゞみ

ひるすゞみ

あれにいさんがまた韻府をば
四角なからうたおやめなさいな。
わいてながれるこのものかげの
泉のうへのひるすゞみ。
わたしにかけなら書もかきましやうが
けふはおいやよゑのぐもふても。
そんな風流はみなすてといて
おだしなさいなおみあをば。
ふなは石菖のしたをゆき

もろこはあをい藻をくゞる。
あれつめたやなさゝなみが
足のつまさきまたぬらす。

にひばか

つみをくやんでみをなげた
わかいをんなのおくつきに
はやくもあきがめぎりきて
かなしうむしもなきだした。

草山の詩

にひばか

あだしひとをばまねくといふ
そてのをばなよをんなめし
はかばにちかうはなそめて
ふたゝびものをあもはすな。

のぎくよやがてさいたなら
はず急のきよいしらつゆを
たまとそゝいてはかつちに
つみのけがれをあらひされ。
はかないゆめをみてさめて
くやんでしんだひとだから。

冬夕薪を買ふ

まけてかへりな北山女
二百あげたら手を拍つて。
出町でさけかひあぶらかひ
あまへもかへりせくである。
あたごの山は雪嵐
いまにもこゝへ来るけしき
けさからほつた文覺の
つらにあんまり力いれ
わたしやゆふげもまだたかぬ。

草山の詩

蘭

味噌と大根を買うてきて
はやく飢をばしのぎたい
こよひもひとよあたゝかに
崎人の傳がよめるやう。
まけてかへりなきたやまめ
二百あげたら手を拍つて。

蘭

へ

香を慕ひけふも訪ひきて
春風の山のはざまに

なにとならあゝ床しやな
襟髪に透るおもひの。
あゝ蘭よ、われはそなたを
こゝろないものと思はぬ。

城の春をとこをんなは
花にさり戀に逢ふ日を
たゞひとりと松の書齋に
一張の琴を抱いて
かぎりない愁を含む
うつくしい瞽女は妹か、

草山の詩
土塊やこがねもたまも、

蘭

世の榮華なんて競はう、
 露霜のつめたいよにも
 あたゝかな愛と涙で
 十字架の教をのべる
 おとゝひは姉がそなたの。
 さよらかな玉のはなびら、
 こみどりの細い葉の袖、
 夕東風にうなづくはなに。
 月圓い今宵もさらに
 泉湧く夢のたにこえ
 尋ねこういはのとびらへ。

春の曲

戀と花との譜を載せて
 春は車を引いてきた、
 柳のすだれ櫻の戸
 世のわかうどが買うやうに。

草山の詩

桐の古琴かきならし
 その歌うたひ暮れるまで
 夢の思に酔ふがよい
 酒は飲まうが飲むまいが。

春の曲

森へ行つても野へ出ても
山分けいるも花の香の
にほはぬ處ないやうに
戀の染めないところが
樹の根に匂ふ磐梨は
やさしや誰の唇か。
岩間を傳ふ谷水は
うれしや誰のさゝめごと
桃の薄紅ほにそめて
はるさめあぶら髪にぬり

草山の詩

水にそのさまうつしみる
山の姿はあてやかな
いばらのなかて苔衣、
冷い堅い石でさへ
蘭のかをりが沁んだなら
出でゝ小町を説くである。
涙のひとも来て遊べ
市の舞殿樂堂に、
花と戀との歌聴いて
春は春らし、暮らすやう。

蟻の天災

澁があがつたわせがきの、
ちざりにこいよ小供等と
つくくぼしが鳴くけれど
残暑が酷い初秋は。

井桁に觸れて桐の葉が
土に落ちても音ばかり、
冷たい虫の聲にさへ
夏の老火はまた消えぬ。

この時吾家の大根蒔、
なつもの蔓雑草は
けづゝて畠の中で焼き
小石は捨てた路端へ

隣畠の作助は
笠の陰から聲高う

「畠はまるで灰のよな
こゝで一雨降らなけりや」

向ひの畑の八兵衛は
「鋤ても鍬ても立ちはせぬ、

蟻の天災

あゝ夕立がさと來たら
穂の出る田にもよからうに

ひやくしよの啣は無理てなご、

髪も額も汗だらけ

力限りにうつ鍬も
弾ね返るよな堅い地て。

浮んであつた村雲は

しばらくすると西山の

七十二峯に影落し
みる看る空に擴がつた。

鍬の鐵焼く日は隠れ

風が吹捲く青野から、

大肌脱ぎの脊中吹き
紺の野邊着の袖を吹き。

一步耕し二歩三步

十坪あまりも行くうちに

あゝ慘憺のありさまや
周章てふためく蟻の群。

悲しやあれは營々と

働く蟻を虚げた

草山の詩
縦令知らずにしたといへ

蟻の天災

その村落を破壊して。

常かひくし小軀で
重い糧でも運ぶのに
蟻は左右に逃げ迷ひ
人の足にも這ひ上る。

わが揮りあげた又鋏の
暴威は突然暗ひとよ
熱沙を飛ばし地をば裂く
火山のやうで噫われは
野鼠の巢を覆へし

その薄命とみづからを
嘆いた西のうたびと
同じ悲しいことを見た。

それに隣の島では
なに喜のその聲は
「とうど夕立がして来るぞ
鳥羽過ぎ竹田をいま越えて」

聞くまに雨の白玉は
亂れて梶の葉に灑ぎ
屋根に跳つて赤泥の
水が島に溢れ来る。

草山の詩

蟻の天災

喜び惶て、歸るもの、
近い軒端に避けるもの、
われも逃れて馳せ歸り
草鞋を脱いて足踏ろた。
今宵百姓は酒うまう、
明日軟かな地がほれる。
地震洪水いちどきに
村奪はれた蟻や蟻や。
智慧と力の限ない
天に情けはないものか、

蟻は小さい労働人、
人は大きなはたらきど、
人は大きなはたらきど、
蟻は小さい働人、
噫あゝ共に全能の
手に造られたものであるのに。

七 難 圖

草山の詩

東福寺にある有名な畫幅である。畫中の人物

は多く裸體であるが、涅槃會にはこれを出す
のて古來京都の士女は、皆この裸體畫を觀て
居る。

噫巨蟒人を呑まうとす。 狼人を食はうとす。
強賊女を汚ぞとす。 赤兒を井へ陥そとす。
衣服を剝がれ財奪はれ路傍の樹に縛られた
男女は素裸で慄き嘆き羞ちて居る。
一幅一幅みな災や。 渦巻く烟、黒烟、
五代かゝつて積上げた財寶も今は灰となる。
濁り溢れて洪水は村も田畑も壊くぢやないか。
雲に閃めく雷電は樹を引つ裂いて地に落ちた
その一撃に焼死ぬる脆くも弱い人間や。
なぜ首縊つた手弱女よ。 辯解のない罪ゆゑか、

悲しい義理に迫つてか。 無情い人を怨んでか、
仰向けに臥て眞蒼にこと絶えて居る玉の膚
染めた血の物凄いとこの一幅はなに示す。
禪林二月雪消えて人は涅槃會に集ふのに
日影の薄い山陰の寒い冷たいこの堂や

獸から來た人間はその獸性をまだ棄てず、
荒野に今もなほ徳ふか。 法律も禮も習慣も
卑しい性を蔽ふばかり。 日々現れる世の雲は
罪と涙と癡愚の色。 心の深い谷間には
まだ形ない罪の石。 獸から來た人間は
その獸性がまだ絶えず、 争鬭凶殺不義嫉忌
數へられない罪惡は日に夜に起らぬ時はなく

義しい者も害はれ、
 常の時に現れる猛獸の爪の淺ましいのに、
 聖の教いたづらに民と民とが相争ふて、
 互に屠る態を見よ、
 人は忽ち獸となつて強盜殺人暴虐も
 白日村に行はれ、
 釋迦の佛が生れても、
 人の心はまた獸。大道亡びて仁義ありと
 いつたは誰の癡言か。法律を一年撤り去れよ、
 人は直ちに獸と化つて世は萬年の昔にかへらう。
 昔曠野の豫言者が悔改めよ天國は何處にあるか。
 近いと叫んで二千年、
 その誤謬の預言のみたゞ會堂に誦んせられ

仁愛廉潔忠貞は恒河の沙に黄金を
 拾ふよりなほ少くて

この世は進歩の記録である、
 善に達する途らしい、
 智慧も情けも道徳も遙に高うなつたのは
 測知られぬ力があつて高い大きな目的へ
 人類を導くのでないか。こんな望を哲人は
 繋いで居るが、なぜ現世には罪と怖があつて
 箇人は犠牲とならねばならぬ、
 總てがそんな目的の爲めに、
 人の歴史は天然を勝ちつて
 この人類は高大な一つの目的に進むのが何望ましい。

七 雜 圖
悲み怖れの現代吾世、人類天に負いたからか
天人類に負くのか。

一夜黄雲が空を蔽ひ、都の園の森暗く、
怪しう凄う鳥が鳴く時、され貝眼、朽穂髪
病魔が静かに江を渡り、眞黒翼を鼓た翌る日、
噫禍や咀れた市、陰陽師變を告げる前、
扁鵲^{ハク}醫師を集める前に病は戸々に潜み入る。
額の病熱と脊の汗と、苦み渴き呻き悶き、
眞夏の熱に青柿が撲れて草に落ちるやう
萬の生命は土と化する。
嘗て恐ろし痘瘡は幾千萬の命を奪ひ
花麗しい顔ばせを毒牙で噛んで傷けた。

牛の病に不可思議の力を知つた賢人に
吾等恵を負ふけれど幾世幾代先祖等は
その禍を嘆いたか。瘦せては蒼い肺勞も
紫血斑な癩病も黒死の病も熱病も
遂に滅る時がある、草木に花に石塊に
靈の力が秘められて人の知術に限ないから。
けれどもそれまで幸ない人は其運命に泣かねばならぬ。
先づつものは来るもの、悲しやみん犠牲となる。
深山に立つ白檀の倒れて朽ちて孽の
樺の雑木を肥やすやう、幾百年後の俗衆の爲め
希世の美人天才はいま倒れるよ。誰いふ病は大昔
人が自然に負て起り、應報が今なほ續くのて
自然の則は破れぬと。さらば吾等は罪なうて

草山の詩

七 雜 圖
ひとの應報を受けるのか。噫人誠に天然に
負いて禍地にあるか。

地震の患火山の禍、人は自然になに負いたか。
春雨に溪の田を鋤き、秋風に山の粟剪り
冬の日には峯の雪分け、野猪狩する山民の
賤が小さい二十戸はなぜ千仞の地の底に
埋められねばならないか。
花に背いて春の日も実験室でまだ人の
知らない造化の秘を闡き、夜深けて秋は燈の下
鳴く蛩と寒さを伴に科學の深い理路をたどり、
その業の九分成了た時、暫く山で氣を澄まし
温泉に體を養はうと雲踏んで來た博士よ悲し。

曉燃ゆる明星の光東に打仰ぎ
夕は廣い青野原、山蘆の笛吹きすさび
岩陰に春消え残る雪眞白な羊の群と
世の汚ない生活をする牧童もあゝ悲し。
溪の板屋で朝夕に搾る牝牛の乳よりも
白い柔らかな素手素足、裏畑で蔬を摘んで來て
土を洗ほらかなと流に臨み、岩間に揺く山百合の
清らに映る吾姿見て微笑む乙女もあゝ禍や。
罪も惱もまだ知らず、慕ふは母の乳ばかりの
幼兒になに罪がある。逃げる間避ける術もなく
上方の峯一時に飛んで岩石火焔熱泥に
千人齊しく葬れるよ

草山の詩

また大海嘯の瞬く間、市あらひ去る禍を見よ
 白木の湯殿石の床、菖蒲で碧い端午のあした、
 やさし美し新嫁が玉の裸形の清らかに
 まだ黒髪も梳かぬのに、雲と光と樹と水と
 愛と平和の世を夢み、清くも高い想をば
 詩人が筆にし始めたのに、罪と報と悔改の
 恵み説かうと街に入り、安らに一夜眠つて起きて
 肅然神に謝して居る徳に満ちたる傳導者と
 油屋殺して奪うた金の分配にいま争ふて居る
 強賊もみな別ちなう、怪しい遠い響を先きに、
 怒り哮つた大濤は陸に打寄せ洗ひ去る
 般富な市をも泡を壊いて。

人の力の勝ち得ない自然の力恐ろしや。
 生んだ赤兒を三月で殺し、才を授けて命を奪ふ
 これが冷たい天である。箇々の人をば犠牲とする
 高い大きい目的とは誠に無慈悲なものである。

花蔭に琴と詩の巻、絶望の薙に坐り
 歡樂の酒酌み交はし人はいふ、
 獸からは来た人間に靈魂などがなにあらう、
 百年はたゞ夢の夢、死は永遠の眠りであるぞ
 思ひに獨り苦むより、蠟乗つて遊ふがよいと。
 髪艶やかに指細く眼凜しい人はいふ
 自然はつらし、人世はかな、怖れ苦み樂みも
 涙とならぬ歡の小さい自然と人生とを

自ら造り恍惚と藝術の園に暮さうと。
ある人巷に叫びいふ優し賢い言葉を陳ね
自ら欺く人々や。この世が遂に夢ならば
まことに善も悪もない。またない命傷けぬやう
苦痛を身に受けけない程に、姦淫なにか貪婪なにか、
無慈悲も不幸も不義もよし、たゞ獸性に從つて
その慾情を滿せやと。

あゝ寒山に落葉掃き春溪林に蕨採る
持律の堅い高僧も、胸に十字架懸けながら
兄弟咀ふ偽善者も畢竟何の差別もないか
花暖かに水溪かな岸の臺に萬金の
魔窟を築く奸商も谷の清水を朝夕酌んで

正しい業と労働きで生涯送る山民も、
國と民との楯となり死んだ軍の英雄も、
國をば賣つた國賊も、その行に善惡ないか。
酒濃かな大館、夜光の玉容と首飾
龍女が織つた綾衣、富と容姿と才とに誇り
その人でない異性の人と汚れた交際するあてひとと、
椰子の葉暗い南の小島、生血に渴く蠻人に
愛の教を宣へ傳へ、或は萬里國を去つて
病の人と孤兒に己を與へた優しい人と
高い卑しい區別がないか。孔子の道は虚偽で
盗跖の徒は真人か。袈裟は愚かな世の道に死に
へロデの妻は本性に從ひ生きた賢女であるか。



奈良金盛の夢跡 (葉師寺三重塔)

七 難 圖

エバが始めて味ひ知つた智慧の木の實の懷疑は
 生命と共に吹き入れられた道義の念と戦うて
 絶える間もない我が思ひ。仰て七難の圖を見ると
 恐ろし自然、悲惨な人生。溪に満ちたる山風は
 窓から梅が香吹き送り鶯法と唱へて啼くが
 釋迦の寂滅たゞ冷かに凄いの悲しいこの一堂や。
 雪が消えても涅槃には人間の冬氷堅うて
 花の彼岸は詩人の空しい想。名書は語る人生の事實。
 あゝ噫悲しその畫こそ儼然とした世の相て。

夢ゆめ夢ゆめ

萬里に連る長城も
雲に聳える埃及の
三角塔も夢の跡
夢ゆめ夢ゆめみんな夢。

楊貴妃のゆめ照君の、
姿つくつて眉はいて
媚をすゝめる宮女等の
夢ゆめ夢ゆめみんな夢。

豊太閤の大き夢、

草山の詩

夢ゆめ夢ゆめ

子孫のためのみ計つてた
家康公の小さいゆめ、
ゆめ、ゆめ、ゆめゆめみんな夢。

いふに及ばぬ戦場て
兄弟互に屠りあい、
名をば留めた將軍の
夢ゆめゆめ夢みんな夢。

詩人千古と誰がいふ、
遺した歌の一巻で
讀まれるものは一二つ
夢ゆめ夢ゆめみんな夢。

偉人の言葉おこなひは
幾代たつても朽ちないと
夢みる人は夢を説け、
ゆめ夢ゆめ夢みんな夢。

偉人も詩人も帝王も
亂臣賊子もなしらも
世界も共にみんな夢、
夢ゆめ夢ゆめみんな夢、

この世ははかな星ひとつ、
遂に滅びてさえる時、
草山の詩

夕

立

何が残るかそのあとに
夢ゆめゆめ夢みんな夢。

わが魂があまかける
靈の世界がないならば
善惡もなく事業もない
ゆめ夢ゆめ夢みんな夢。

夕立

降ってくるふつて来る大夕立が、

草山の詩

にらみあうた敵軍の
密集部隊がかけてあして
わが村めかけて突さくるやうに。
くろぐもしらあめ凄し勢、
はやしを掩ひ森を越え
家並そろうた一筋の
街道を破つてそら野邊へ出た。
草籠擔きにけゆくわらは、
蓑笠負うて走るしづ、
椽の戸なかばしめよせて
簾を下ろす手弱女や。
そら来たきた来た、撃て突け斬れや。
閃めく長槍とびくる白矢、

おきてやぶり
屋根が漏るもる小筒の響、
にごつた血潮に下駄が漂ふ

をきてやぶり

「小父さん隠しておくれなさい
わたしや死んでもいにませぬ。
木綿の機も絹機も
どんな機でもしつてます。
鹽でお粥を吸つても
わたしや織子でゆきまする。」

鬼みたやうなおかさんと
それらもまことの親でなく
畜生のやうな兄ゆゑに
賣られて今でもう二年
紅白粉と綾絹で
涙と嘆あしかくし、
氏も素性もきごゝろも
しれないひとに夜をこめて
くやしなさを慰まれ、
ひるは無慈悲な人々の
きげんに小さい氣をばもみ、
思うてみれば思ふほど
耻かし厭なうきつとめ。

草
山の詩

もし兩親が居られたら
 をなご番頭でいまごろは
 五十の機の晝夜鳴る
 織場で帯や錦織る
 女の衆にたてられて
 暮らしてゐやうに樂し日を。
 思うてみればおもふほど
 耻し厭な憂きつとめ。
 いまは却つて羨し
 鞍馬の奥で雪を分け
 炭俵負ひ運ばうが

宇治槇の島月の夜を
 網をばすいて更さうが
 りちぎな人につれ添うて
 心のとかに棲むひとが。
 山師もちにげなまけもの
 あんな處へくるひとは。
 思うてみればおもふほど
 耻し厭なうきつとめ。
 小父さん隠しておくれなさい。
 金は稼いで返します。
 どしてもわたしはいにませぬし
 店には鹽つるべひつ

おきてやぶり
水桶などがしあげたる
奥のひとまで泣き口説く
たわやをんなよ可愛そに。
小庭に苔む小櫻に
木傳ふ鳥の影静か。

七日程してまたこゝで
「くやくや、きさまは大林
夏ちふ女であるぢやらう。
こんな處へにげてきて
ふとじきしごくな奴である。
これからおれと一所にこい」
つるぎをつけた法律は

耻と操と人道の
髪を逆手にからまいて
けがれ淫れでくらやみの
地獄へふたゝび曳いていた。

新琵琶行

柳散り燈寂びた吳竹の
伏見の濱の乗場をば船は離れた。
乗合客は三十石の昔の夜船しのはせる
風俗さまざま。紺の一反風呂敷の

草山の詩

大きな包に凭^たれてる商ひ男、道具箱をば
 側に置き箕^こ踏^かてる散髪は大工の弟子らし。
 紅白粉の化粧濃く鬘の歪んだ娘等は
 どの紡績へ行く群か。
 西國順禮賣^うト者巫女遊びにん男衆、
 男女の分け隔てなく膝つきあうて坐つてる。
 隅の方には北八と彌次郎兵衛さへ居そである。
 翁の病に驅けつける京の去來や薬匙
 大津から來た木節の姿はどうか。
 その中に廿三四の若人と三つ四つ上の
 女とが窓に凭^たれて對こて居る。
 二人共もとより同郷の人でない。
 だひぶん寒うなりましたといつたばかり女の方は

美しい顔に曇を帯びて居る。
 船室はまだ静らず、菓子賣は黒い素足で
 人の帯や袖踏み歩き浪を剪る
 車の廻る彼方では銅金のよな眞裸が
 風呂を上つて體をばいま拭いて居る、
 淀の小橋を暫くすると船はくゞつた。それは水夫らし。
 眞菰は萎れ城荒れて郭公聴く主もない。
 この時女は若者に何處から來て何方へ
 行くかと問ふと若者は京の家をば夕暮立つて
 浪華へ下る途である。そしてそれから泉路を
 南へいつて物寂びた古國の秋の静けさを
 詩囊に満たして歸ると答へた。
 同じ事をば若者が尋返すと何げなら

女は答へた夫から暇をばとつて大阪へ
 奉公にゆくと。若者はやゝ驚いたやう
 なぜそんなことをなさると問ひかけた。
 女は始めその故を話さなんだが暫くすると
 口を開いて
 わたしの家は橋姫の待夜ひなしい宇治里。
 廿歳の時にもらはれて伏見の町のさる家へ
 嫁つて来ました。その時隣の大工の家に
 才人な子が居りました。まだ十三の小娘の。
 遊びに来るのを可愛がり夫婦の者が世話焼いて
 三年五年たちました時、男と女といふものは
 呆れたもので、昨日の思は今日の讎、
 油断がならぬと思つた時は六日の菖蒲、

娘は身重になつてゐて暫くすると玉のよな
 男の兒さへ産みました。それに夫も姑も
 私に小兒がないといつて二人のかたを附けもせず、
 そして私はこの始末。嫁入はもう懲りました、
 わたしやこれから一生涯奉公しやうと大阪の
 するべ尋ねて行くのです。
 かういつて沈んだ目を擧げ愁然と若者を見た。
 まだ世になれぬ詩人はどう慰めてよいか知れず、
 たゞ薄命な人は世に決して少くありません、
 あなたは年もまだ若く美しいからまた直ぐに
 樂しいことも出来ましよう、
 年が若くて美しいのほゝ私に美しと
 誇と見える。ほゝ私に美しと

嘲み笑うた冷かなその微笑に喜びが
 閃めいてある。
 この時忽ち甲板で尺八の音が清く響いた。
 一所に乗つた乗合の二人の書生のすさびらし。
 耳を敬て聴いてると嘯と響くその音は
 兩岸に遠く聞えてこのゆふべ秋を悲む
 橋本の遊女も爲めに袖絞るばかりであつた。
 暫くすると笛の音は止み、此度は詩吟の聲が起つた。
 いま船は山崎の峽を出て、津の國と
 河内の境を進むので淀川の廣い流は
 漫々と愈々廣い。そして今宵は満月である。
 鏡を研いだ月光は大江の流に満ちて
 皎々と白銀流したやうである。

夜は真静かて敷浪が船脚に鳴る音ばかり。
 そして詩吟は朗らかに透徹たる好い聲である。
 何を歌うて居るかと聞くに鞭聲肅々夜河を
 渡るでもない、残月の滴露でもない。
 さればといつて踏破る千山萬嶽の烟でもない。
 書生は實に白樂天の琵琶行をやつて居るのだ。
 潯陽の江頭夜客を送る、荻花楓葉秋瑟瑟の
 起句は聴かないさきに過ぎた。けれども聞くと
 「猶琵琶を抱いて半ば面を遮るや、
 「未だ曲調を成さず先づ情ありや、
 「眉を低れ手に信せて續々として彈ずやら
 「説盡す心中無限の事などいふ箇處は
 その詩か詩なり聲が聲なり、いふに言れぬ趣がある。

詩吟は「唯見る江心秋月の白さを」といふ半途で止んで
 その後の「老大嫁して商人の婦となる」といふ述懐や
 江州の司馬が青衫を濕したといふ結果も
 聞えなんだがこの秋の満月の夜この淀の
 流の上で愁多い身の上を聞きこの詩をば
 聞いたのだから若人の想像は忽ちかの琵琶行の
 詩の中に馳せ自らは江州の司馬となつてしまつた。
 そして對坐の女を見ると幻に琵琶行の婦に見えて
 傍の小な行李は圓らかな琵琶にかはつた。
 なんの好い聲でといつた女はむろん
 この幻を知る筈がない。
 夜が更けて來た。乗合客は伏見で買うた
 松茸入の苞のやうみな横になり

女も共に居睡りかけた。若者もまた舷側に
 凭れて目をば閉ぢかけた。併し女の髪の毛の香や
 衣の匂で睡むれない。まどろむともなくまどろんで
 頭の上の聲音にまた目覺ますと美しい
 琵琶の婦はつゝまじう横に臥て居る。風寒い
 汀に宿る雁のやう枯蘆色の肩掛て身を掩ひながら。
 青味を帯びた白い額と紅まだ褪せぬ唇は
 觸れても見たい程である。足と足を重ねて居つて
 着物の褸と足袋とのあひが寒げに少し露れて居る。
 けれども其處へ肩掛も着せよともせず若者は
 また寐てしまつた。
 八軒屋へまだ夜深いに船は着いたが
 乗合の衆は散去らず乗場の家の二階へ上り

夜の明けを待つて居る。二人は此處へも相伴うて
 炭火の白うなりかけた大きな杉の火鉢の前で
 互に身をば寄せかけて語り明かした。
 若し若人が押照るや浪華に獨り棲むもので、
 その時女に打對ひ奉公などはせぬがよい、
 私の家に来て呉れて煮焚のことや裁縫の
 世話なつたら三日して去んで呉れてもよいといひ
 厭になつたらもう三月経つても半年しても
 女がそれを諾なうて三月経つても半年しても
 去なずに居たらどうである。
 また若人が職工の長なんといふ身であつて、
 そんな卑屈なことをすな、己れの腕で獨り立て、
 額に汗して日々を心の儘に暮せと説き勧め、

それから二人が相携へて岸の宿屋に相宿して
 打つけに口説かれ口説き煤黒い長屋に同じく
 棲んだなら、冬の夜は大和炬燵を抱き合ふて
 親しみ話し蒸熱い夏の夕は水打つた
 軒の葱を愛であうて暮らして居たらどうである。
 併し二人の運命は一つてなかつた。
 夜船の中で相逢うて暗い二階で身を摺寄せて
 丁度霜夜の戀人のやう私語きあうた二人の者は
 岐路へ外れず真直に志す處へいつたのである。
 夜が明けゆく琵琶行の街は西へ立ち去つた
 漠々として塵深い浪華の街に埋れるため。
 またその若い詩人は泉路を經て紀の川の
 谷をば越えて秋淨い高野の山で白雲と

秋の草深



新 薨 行
共寐しやうと匆々と南へ去つた。

草山百首

あたらしい靱もてきても賤はみなめしひてど
この田へもまかさぬ

歌加留多しろいひたひに典侍どのと黛かいて
きとにらまれた

ありたつて雪解のあぜにすべりこけた女にほ
へよ芹に薺に

草山の詩

草山百首

そら出たぞ狐兔とさけふをりまた雪がきた松
に小笹に

きさらぎや春まださむう月さえて臥牛のやう
な黒い夜の山

京はかすみ近江はやまに雪まだら鶯啼くか杉
の大比叡

麥を折り菜の花ちらし小狐がはせさるのずる
くれる春の日

梅椿かたやまざとはひとつみち娘みにいて見
られてかへる

牛車菜の花黄いな野のうへにかすみの古塔は
るもやの山

花幾日てらにうてなに畫のむしろ大雅堂説く
帶商人も

ながい日を花に暮さずゑすがたの普賢菩薩と
共に讀みゐる

草山の詩

樹を石を花が燃やして繪板戸の雉もたちそな
寺の春日や

春の日は愛宕参りのあしよわのかたの檣に薫
じて暮れた

紅椿灸屋たづねて灸すゑてはなもみてくる大
鹽大原

春の暮おれのみやびは唐タカラの天子牡丹ものいへ
牡丹ものいへ

詩囊干したさまやまどかな寺の若葉六如は花
の雨にぬれたか

ぼたくと椿落ちるや西の京うたにかくれて
典侍のすむ家

茶のにほひ茶師のいへいへみな床しよい娘あ
る宇治と木幡と

わが寂びはみやびは雨に月の夜に元政團扇や
まほととぎす

草山百首

病む床や撫子挿させ蓮月と近子の集に點しゆ
くなつ

市の夏はちの杉檜を買ひならべしんざんに臥
し幽谷にねる

檜原ふかう日がさしこんで熊笹のしたくどり
てる春の山水

手弱女のはぎりのやうに鳴く蛙はなも今宵の
雨でちるやろ

つゝましろ話すいまの身はなかげて唇觸れた
日もあつたのに

花もちるかきみは近江にわれは浪華袂を分つ
春盡の日に

たけつばき戀物語かくひとゝ發句する人の家
のさかひに

詩を袂に僧訪ひゆくと眞竹藪やぶから棒にう
ぐひすの啼く

草山の詩

草山百首

元政の病を題にものかいて爐にうづこまる餘
寒のひとひ

詩歌ないひとは名だけを題しさるうてなあら
らぎ花の繪のなか

うぐひすや遠音きゝ聞きいしにほる「多少樓臺
煙雨中」と

ちる花やもえる若葉や春の暮なつのはじめの
境しれずに

けなげにもなほ獨棲む琴弾いて散敷く花をま
もりながらに

琵琶の婦刻みもはてず夢のうちに春は暮れる
というてゐたのに

兄も泣きいもとらも泣き母も泣き生命きえゆ
く御顔をまもる父が死なれた時

花七日涙にくれてふとみるとまたも若葉に世
はうつりゆく

草山の詩

草山百首

躑躅さく山寺ありて湖にそひきみとそと逢ふ
鮒鯨の家

ほととぎすひとこゑ鳴いて満月の光ましろな
みづらみのうへ

あけ寒い淀のながれや河内から津の國かけて
なくほととぎす

竹婦人をりをり櫛掛けてきて夢のくりやに瓜
きざみぬる

唐人の落第の詩を讀むやうな花傷ましう散る
暮の春

汐干潟木履女もいつのまか跣足になつて貝ひ
らひゆく

梅雨晴やにごつた水がやゝ澄んで紫陽花うつ
る藪蔭のゐど

森は花うすむらさきにあをになり七十二の峯
日が薄う照る

草山の詩

草山百首

焼瓦ばたばたと打つまばらあめのそのまゝ過
ぎて蒸熱い夕

木履さへ香にしむてある軒に菊もゝかぶ栽
るた島原の家

鬢に満ちた菊や黄菊や曆数の書を読みやめて
むかへるひとの

柿の家老女はむかしなつかしみ齋の宮の戀も
はなすよ

詩成らず畫家は筆とりあきを訪ふ題を紅楓と
車とにした

星董しるしをかへよ汚れたる心臓はくさい十
薬の葉だ

ちる紅葉玉手をすべり甕を撲ちひとつは清い
硯に落ちた

ちとせ鋪びた古釣鐘か紅葉ちつて静かに秋の
暮れるすがたは

草山の詩

草山百首

しきいしに黄菊の影はにほひながら
經師屋の軒また時雨する

寒い街しぐれた馬の鬣のかわくまなうて
日がくれてきた

このふしもまた興あらう時雨日記
某女某女の琴に銘かいてゐる

しろいのは初雪したかみすゝかる
信濃は寒い國蕎麥の山

杜彌船の障子に寫つせさむは夜のみづの浪華
の戀物語

冬の梅われもことなく唐詩選の繪本
ひろげて日を負うてゐる

銀杏の樹はるかにもみるとだゞひとつ
黄金で鑄たる葉を立てたやう

雪のあさ竹揺り起し小徑あけすむと梅など
椽の日向へ

草山の詩

草山百首

あの陰はそこびえしやう寒雲が一簇かゝる葛
城の肩

ゆきふかい越の白山しらぎぬの乙女とながめ
年を経たのに

雪今宵封じおくした梅を嗅ぎ潮暖かな紀路も
もひゐる

一傘のみぞれにぬれて逢ひにきたはたち姿を
したしむ一夜

雪の山またあれてきた寒巖に詩偈とゞめた僧
のゆくへは

さかしらな世をば忘れて耶蘇祭こよひ天國い
まこゝにある

耶蘇君に不犯誓うたとつぐにの尼も年とるわ
れもとしとる 歳暮電車の中で

薄命はまたも説くまい梅一鉢ほん二三冊買へ
る師走だ

草山の詩

詩がるたは「范叔の寒」や「單子」やら「郎が衣を牽く」
さみやらが

きてみても父はゐまさぬ去年こゝて具慶の身
だと喜んだのに

齋粥酒肉五辛かつてみぬ淨はくりやてあさげ
するやう

わがおもひ來ては流れてはてもない草軟かな
岸の春の日

二大佛七城いづこはるもやのやまと流をした
にみる山

夢のよな遅日を惜みしろを出た官女の車はな
の散る日は

薄草老いた處女とひとはいうて誰もしらぬ
あなたあるのを

城ははや殘花も落ちてみづみづし若葉の街に
酢莖うるこゑ

そのびあの聴くよりたへな痴話文のぬしにひ
かれてまた山をてる

橋越えてもしやと今日も待つおもひ葵祭に見
たたびとを

金閣にうすぬのをしてやまざくらもの静やか
な春鹿苑寺

やわらかなこの手扇にさゆりかき白字の雅號
小さうおした手

梅そここゝ足はいつしか美しくしゆて絶句さへ
作るひとの庵へ

なかにはの竹はまださむい室町や紺の暖簾を
春風の吹く

古株の柳のしたをはるのみづ臥牛立つ牛尾を
ばふる牛

春は逝く山吹の黄は雨に濡れ三味線草は泥に
まみれて

なつかしや春日の巫女の返へし歌藤の若葉の
さすわが窓へ

ひとの櫛菖蒲を彫るとほとゝぎす鳴くや五月
のにほひさへして

茶摘女のねくたれ髪や明け易い黄檗山のあさ
のかねなる

歌成つて椽にたゝずむ若竹におそうぐひすの
きても鳴くかと 霞谷林の歌會に

幕のやう栗の若葉のさす陰にやまびとめいて
われも棋を看る

卯の花は白いばかりのはなゝれど御達の戀も
上達部のも

一夜さもとめずとまらぬ女の友と來て螢看る
清瀧の里

梅雨晴や大竹藪のしげみからひとつ眞白な蝶
が出てきた 草山の詩

草山百首

櫛笥塗るうるしのやうな黒髪にましら白百合
大きくさして

釣葱涼しい草と愛てながらながめて暮らすお
もひを知らぬ

掛香や夏はすゞしい水色のふくろに縫うた名
と魂と

行水や隣のきみにふときられはだか耻かし夕
顔のはな。

野の泉ひるのつかれはやすめたがたゞかくラ
ケルとその水雍と

更ける夜はなつもすゞしや満天の星は滴り袖
ぬらすやう

ひとは南無神變大菩薩など書く檜木笠峯の絶
句をかきつけておく

あなじ碧に三百里すむあきのそら大峯山の色
がやゝ濃く
草山の詩

草山百首

秋の風やなぎのえだに琴掛けた囚人吹いた愁
を帯びて

うきぐさ集

清

き

泉

イヌマイネームリツンセヤの譜に合せ校
歌に擬して作れる(讚美歌第三百五十六と同譜)

ちぬのうなばらせつのかまや、
よいかはなをたのしましむ。
ときはかはらぬまつのかげに
たどむわれをひとはしるか。
まやのたにをながれいづる
かのましみづとわれらはならむ。
草山の詩

かのみちからのみちわたれる
 かぬかしをかたらはんと
 たきのうばら攝津のやまや、
 かまのたにほまれあらむ。
 かまのましみづとわれらはならむ。
 かまのましみづとわれらはならむ。

われをたしせよ主のためにと、
 あしたゆふべにせちにおひ、
 まなびのまどのたかきおひ、
 ゆめにみてのみやむべきかは。
 かまのましみづとわれらはならむ。
 かまのましみづとわれらはならむ。
 そびえてたかきこのいへこそ
 きよきいづみのみなもとなれ。
 かはけるものいざやいざさむ。
 にごれる世をばいざやすまさむ。
 まやのたにをながれいづる

草山の詩

草山
 の詩
 には
 のか
 まど
 は柴
 ゆゑ
 燃ゆ
 る、
 か
 のな
 がれ
 は日
 毎に
 酌み
 やる、
 く
 みて
 よ胸
 のわ
 があ
 もひ。
 た
 つな
 この
 戀ゆ
 めに
 だに。
 き
 みが
 眞玉
 手あ
 やぎ
 ぬ裁
 てど、
 あ
 かぬ
 はさ
 きみ
 が濃
 いな
 さけ。
 も
 たひ
 のう
 まざ
 け酔
 うて
 は飽
 けど、

俚歌數曲

のうな
 ちぬ
 らせ
 まつ
 のや
 まつ
 よい
 のた
 はい
 ぼら
 まつ
 のつ
 げに

俚歌數曲

れを
 たの
 しま
 しむ
 こと
 だ
 すむ
 あた
 をひと

はむ
 るか
 まや
 のた
 こむ
 なわ
 れい
 づる

ま
 し
 み
 づ
 と
 わ
 れ
 ら
 は
 な
 ら
 む

わが家

わたしのむねはこひゆゑに。
○はるかせふけばおくやまの
たにのこほりもとけゆくに、
かくまであつきおもひにも
きみがこゝろのなせとけぬ。

わが家

ニヤラーマイゴッドツリーサーの譜に合せ北米アラメダ
日本人教會の爲めに作る(讃美歌第二百四十九と同譜)

葡萄の實のみのれよ、
百合の花のさけよと、
つとめはげむ神のこらに
涼しくふれあめりか。

あした星を戴き、
ゆふべ月を踏みつゝ、
いそしむ身もかみのまへに
つどふときを樂しき。

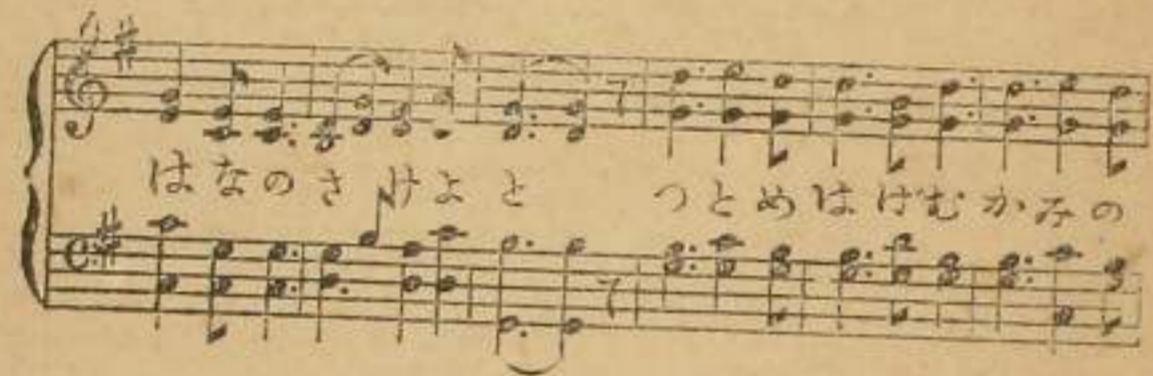
額の汗ぬぐひて
きけや友よ主耶蘇に、
瘦れたるを慰はせんとの

草山の詩

草山の詩



ぶだうのみのみのれよ ゆりの



はなのさけよと つとめはけむかみの



こらにすいしくふれあゆりか

わが家

めぐみ深きみことば。

ゆめならてはゆくすべ

なみのほかの故里、

泣きて祈り笑みてうたふ

かみの宮ぞわがいへ。

石もとけなむまひるに、

重荷はこぶをうしの

こけの清水慕ふがごと、

喘ぎぞよらむこのやに。

あめりか竹枝

其一

あめりかをんな髭はやし
あめりか男ひげをそる。

女が馬に跨つて

男が髪に油塗る。

さても可笑しのなりふりや。

をうしのやうに舌巻いて

燕のやうに語りあふ。

其二

さまといふ字がない國なれば
兄弟さまをも名を呼びすてや。
町て名高いお醫者の娘、
姉がはたちて妹がついて
ひきぞわづらふ菖蒲草。
園の葉蔭で語るをきけど
マザ、メリと呼ふからに
どれが姉やら妹やら。

其三

千戸の邑には郭あり、
柳亂れて花を散る。
さだめ悲しい遊び女の
色弄ぶ酒の香や、

あめりか竹枝

これはいづくの島國ぞ。
千戸のむらのあるところ
そこにははたてりふみのくら。
たとへは秋の山陰や、
人の知識の結びたる
木の實は枝に細逕に。
たとへは春の岡邊や野邊や
觸れて柔らかな書の詩の琴の
花ぞ妙なる香に匂ふ。
節を携へ裳をばひく
清き遊ぞうたふべき
われあめりかにこれを見る。

其四

草山の詩

男女七歳席わけるとは
からの聖ぞかたくなし。
馬にひかする車はせまし、
共にゆかふのすべもなや。
男はすはるをみなごと、
をんなが二人またその膝に。
駒よかけゆけ車は輕し、
風やわらかに花袖を撲つ。
あゝ青春のたのしみや。

其五

さみは黄金かわれしるがねか、
黄金白金ちりばめてこそ
戀の宮居はこよなけれ。

きみは黄菊かわれ白菊か、
黄菊白菊咲き交りてぞ
日影いろ添ふながつきの。
繪にみたるのみてまだ知らなんだ
富士の白雪わが口紅の
見染めて染めたそは春の宵。

空爽やかに山青く
濤また碧き早秋のけふ、
袖を聯ねてこの巖角に
かの大洋を眺れば
鷗飛びかふ沖つ波、
雲の紫くれなるを

のこして沈むゆふひかげ、
渺茫としてかぎりなき
うみのながめぞ大なる。
ながめは君よ大きくも
西てふことは忘れてよ。

其六

千船八千船ゆきかへる
これの港の水よりも
おのが思ははや深し。
後のやまの山陰の
岩間をつたふ水よりも
あのがあもひはいや清し。
蜜より甘しと誰かいふ、

あめりか竹枝

水より清き吾戀と
いひけむ人はいづくぞや。
こゝて抱いてくちつけて
泣て別れたこのふたとせを
きてはしはばく、歎くかな
葉は濃緑に花白き
木蘭の樹の下陰に。

ぬれなば露に濡れよかし
涙に重きさよごろも。
光悲しきこの月の夜も
あもひは萬里の潮につれて
きみがすむてふ駿河なる

清見が關をあらふぞや。
またも送らんつれなやと
ひとの教へたやまとことばを。
其七

髪はあれども尼のやう、
女なれども夫を知らず、
あけの唇父ならで
誰にか觸れむ紅の花。
十三鳴らす琴の音に
鳥も小窓に通ひけり。
十八まなびの山深く
はたちの坂越え谷いくつ越え、
ちりゆく花を惜みつゝ

草山の詩

來れば涼し夏木立、
港へて碧き湖の
ほとりに何を觀じけむ
三十とつかずはぐま
人は良き妻うしなへど
國はよきこを得たりけり。
出てゝは小村の學屋に
うなるが群の母となり
蔓の蔭の日も照らぬ
塵の巷に身を投げて
泣て罪人よび招く。
見ようら若き望をも
犠牲に捧げて大洋の

はなれ小島に道を説く。
四十曉はつしも寒く
まばらに髪を侵せども
なほ常春のくれなゐに
笑むやこゝなる花薔薇。

其八

花の林に鐘鳴れば
民は集ひて會堂に
神を拜ろがみたてまつり、
落葉に霜の寒き夜も
とも來りてこのとに
ねぎごと捧げたてまつる。
赤繩結ふもこのとに

あめりか竹枝

亡き葬るもこのみやに。
みよ日曜の聖き朝、
男女か業をやめ、
経携へてゆくさまを、
心のどかに體ゆたか。
酒賣る家につどはんや、
文雅の筵も神の前、
處女ぞうたふ朗々、
調優にして聲きよく、
をのこが説くや堂々と
おもひは高くむね深し。
雪白妙の冬枯に
街の捕手の影をみず、

草山の詩 終

草山の詩

緑の陰の深き時
家の讀書の聲をきく。
隣に七里さともなき
けもの鳥の荒蕪をば
誰か拓きて住み初めし。
天を敬する民等にぞ
平和幸福はとほある。
牧場に牛の乳は流れ、
蜂は花より蜜はこぶ。

明治四十二年十二月廿八日印刷
明治四十三年一月一日發行

定價金五十錢

不許
複製

著者兼
發行者
京都府紀伊郡深草村
第百廿四番戶一號

青山嘉二郎

印刷者
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

佐久間衡治

印刷所
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社

秀英舍

發兌元

至誠堂

電話本局 三六一六六七

東京市日本橋區本石町三丁目

霞村著作目録

池塘集

擬古派の圏外に言文一致の一新境を開いたもの

報知新聞評して曰く清新中央新聞曰く俗語の好趣の詩想と調和して遺憾なく顯はれしもの少らず文章世界曰く著者は何人が知らぬが餘程蘊蓄のある人らしいと此歌集は舊派新派同一

深草の元政

真に元政を知る者少し多くは唯面白さうな人たるを知るのみ霞村は草山に成長して元政上人を最能く理解する人十年前より想を構へてこの詳傳をなす

上人の眉目始めて明なり文亦清淡頗る愛すべし云々(東亞堂出版)

劇 マンフレッド

絶大壯觀である。往時一青年藤村操は華嚴の瀑に投

じて死んだ。その時書き遺した巖頭の感に「ホーレシヨの哲學」の語あるとこの詩の巻頭に沙翁のハムレット劇中の「ホーレシヨ」の天地の間には汝の哲學にて夢想するより活劇の物あつて存すの句が題してあつたのから推すを彼の藤村は實にマンフレッドの想ひ遂に二三の山伏僧を相携へて金峰千仞の險を攀ぢ聊か平生の渴を醫やすことを得た。後數年筆を執つてこの劇を譯したのである。(近刊)

前後 ロックスレー館

道人心を維持したのは大ブラウニングと大テニスである。然として時潮に屈せず世の中の大傑作て前者は從姉に對する失戀に筆を起し詞句宏麗に情緒纏綿。後者は六十

年後愛孫の失戀を慰諭し己が戀敵の老死を悼むに始まり思想深遠博大である。二者共此書逐字忠實に譯し且つ評註を加へてあるから英學生にも最有益である。(近刊)

小説と 活歴史 シー・ブロンテ

ミッリーと携へて大陸に遊學した時端なくも妻ある一教授を知り敬愛の念は何時しか戀情の情となり終身醫し難き苦痛を抱いて家に歸つた。然かも強固な道義心はその惑

情に打勝ち得て光榮ある凱歌となつたのである。ゼーン・アイルとツイレットとは實に女史がその心血を瀉いて描いた二大小説で、前者の熱烈奔放なる後者の細心精緻なる共に英國文壇の逸品である。往時鵬外漁史一葉女史の著作と其の歴史を云々した時評壇それが爲め喧しく、近來またモデル問題は大なる騒がしかつた。この書はその小説は直ちにその閑歴である。ブロンモル女史は大なる興味深いものである。この書はその傳記と二大傑作とを叙し更に双方の關係を説明した趣味深いものである。この書は其の著者會て日本口語文典の盡く外に編せられてある。米人に見て我國學者の怠慢を慨けいたが内外國で著者會て日本口語文典の盡く外に編せられてある。米人に見て我國學者の怠慢を慨けいたが内外國で著者會て日本口語文典の盡く外に編せられてある。米人に見て我國學者の怠慢を慨けいたが内外國で著者會て日本口語文典の盡く外に編せられてある。

日本口語新文典

を書いた。近來二三文典が上梓せられたからこの語を教へ其経験を以て併しこの稿は外人の著書を譯したやうなものではなく、彼等の誤謬を正し説明し得ざる點を説明しやうと試みたのである。躰裁も他の文典と大に異つた點が多い。由つて稿を存して一般の參考に供するのである。(近刊)

